

目次

序にかえて

木下 聡 1

総論 斯波氏の動向と系譜

木下 聡 6

第1部 斯波義将の時代

I 南北朝期における守護権力構造

河村昭一 58

— 斯波氏の被官構成 —

II 足利義持の初政と斯波義将

臼井信義 122

III 斯波義将の禅林に対する態度

今枝愛眞 134

— とくに春屋妙葩との関係について —

第2部 斯波義重・義淳の時代

I 室町期の斯波氏について

小泉義博 156

II 斯波義重の動向

秋元信英 191

Ⅲ 管領斯波義淳の政治活動 — 將軍義教初期の管領・重臣會議 —	河村昭一	205
第3部 斯波義敏・義寛の時代		
Ⅰ 『大乘院寺社雜事記』『文正記』に見る長祿・寛正の内訌	瀬戸祐規	258
Ⅱ 斯波氏三代考	小泉義博	285
Ⅲ 斯波氏と室町幕府儀礼秩序 — 書札礼を中心に —	小久保嘉紀	309
第4部 戦国期の斯波氏		
Ⅰ 守護斯波氏の失墜	下村信博	340
Ⅱ 戦国期の越前斯波氏について	佐藤 圭	364
Ⅲ 朝倉氏戦国大名化の過程における「鞍谷殿」成立の意義	松原信之	392
第5部 斯波氏関係史料		

初出一覧／執筆者一覧

管領斯波氏

総論 斯波氏の動向と系譜

木下 聡

はじめに

斯波氏というと、足利氏の一門で、室町幕府下では高い家格を保持し、尾張・越前・遠江三ヶ国を始めとする各国の守護を務め、三管領家の一つとして知られる。それと同時に、度重なる当主の早世と、養子に入った義敏と義廉の家督争いで勢力を減衰させ、応仁の乱後には越前を家臣朝倉氏、遠江を駿河今川氏に奪われ、残る尾張も守護代織田氏に実権を奪われ、ついには織田信長によって国から追放された、といった認識もされている。

本稿ではそうした斯波氏について、まずこれまでの研究状況と、今後の課題を述べた上で、各時代における斯波氏の政治的動向を、系譜関係を明確にしながらか略していきたい。なお論中で言及する系譜関係は、基本的に一次史料の記述をもとにしているが、それだけでは不明な部分も多く、系図類や斯波家譜（本書第5部）で補っている。

一 斯波氏に関する研究と課題

斯波氏についての研究は、核となる史料群が無いこともあって、戦後になってようやく活発化した。

まず注目されたのが、斯波義将と、応仁の乱における斯波氏の家督争いである。前者は、足利義満死後に政治を執り始めた義持を補佐した義将について見た白井信義「足利義持の初政と斯波義将」（本書所収）や、禅宗、特に春屋妙葩との関係に注目した今枝愛眞「斯波義将の禅林に対する態度」（本書所収）があり、また一九八〇年代まで下がる「竹馬抄」から義将の思想を読み取らんとした布川尚志氏の研究がある。後者は、永島福太郎『応仁の乱』などに代表されるが、主に通史の記述として乱そのものを取り扱うことが主題であるため、斯波氏を主眼にいたわけではない。なお義将以外の斯波氏当主を個別に検討した最初の論文は、義将子の義教（義重）の政治動静を明らかにした秋本信英「斯波義重の動向」（本書所収）になる。

一九七〇年代になると、斯波氏について様々な研究がされるようになる。

まず斯波氏そのものを取り上げたものとしては、鎌倉～南北朝期の斯波氏の政治動向を詳細に解き明かした小川信氏の一連の研究があり、現在でもまず参照されるべき基本的文献である。また、義敏・義廉・義寛の三人を取り上げた小泉義博「斯波氏三代考」（本書所収）や、越前国をめぐる朝倉貞景と斯波義寛の争いを検討した松原信之氏の研究も出た。その後九〇年代に入って、義将～義淳期については、小泉義博「室町期の斯波氏について」（本書所収）⁴や、斯波義淳の管領就任と辞職について検討した河村昭一氏の研究、及び同「管領斯波義淳の政治活動」（本書所

収)があり、応仁の乱前後については、足利義政の東国政策の中での斯波氏の位置付けを明らかにした家永遵嗣氏の論考が注目される。そして、興福寺尋尊・経寛、「文正記」、それ以後の軍記物の三つの観点から、斯波氏の内訌がどう描かれているかを見る瀬戸祐規『天乘院寺社雑事記』『文正記』に見る長祿・寛正の内訌(本書所収)もある。

また斯波氏の室町幕府内の儀礼的立場については、その高さは知られていながらも、従来全く目を向けられていなかったが、近年になってようやく小久保嘉紀「斯波氏と室町幕府儀礼秩序―書札礼を中心に―」(本書所収)や、谷口雄太氏の研究が呈されている。

一方織田氏・朝倉氏に取って代わられる、没落していった旧来勢力として扱われ、ほとんど顧みられてこなかった義寛以降の斯波氏についても、今川氏の遠江侵攻をめぐって、斯波氏がそれに抵抗して戦ったことに注目した秋本太二氏の研究が示された。これはその後家永遵嗣氏や森田香司氏らの論考に引き継がれている。また、主眼は義寛家臣の織田敏定ではあるが、明応の政変以前の幕府における義寛の政治的立場をも論じた松島周一氏の論考がある。ただ十六世紀段階の尾張斯波氏そのものの専論は、史料の限界や関心の薄さもあってされることはなく、『新修名古屋市史通史編』などの自治体史や、台頭しつつある織田氏との関係の中で語られているのみである。

越前に残った斯波氏一族についても、鞍谷氏が義廉子孫であると松原信之氏が指摘している。その後この鞍谷氏を中心として研究は進められ、佐藤圭「戦国期の越前斯波氏」(本書所収)や、松原信之「朝倉氏戦国大名化の過程における「鞍谷殿」の成立の意義」(本書所収)が提示された。

また斯波氏の守護領国についての研究も、守護領国支配研究が活発であったことから進み、こちらも七〇年代以降、尾張・越前・遠江各国の守護代の沿革や守護支配の実態が検討された。尾張については、『清洲町史』などの自治体

史の記述をふまえ、斎藤純雄氏が、国衙領を題材にして領主支配と守護土岐氏・斯波氏の支配を検討し、杉村豊氏が、応仁の乱終焉から織田信秀登場までの時期の、織田氏の尾張支配を明らかにしている。越前については、守護代を検討した小泉義博氏の研究⁽¹⁷⁾があり、遠江については、秋本太二氏が今川氏を中心に遠江の守護支配を述べる中で、斯波氏の支配について触れている⁽¹⁸⁾。

八〇年代以降でまず挙げられるべきは、河村昭一氏の一連の研究⁽¹⁹⁾で、斯波氏の守護支配や守護代を検討している。遠江では遠江守護の沿革を明らかにした吉井功児氏の研究があり、その補論は斯波苗字について論じた貴重な論考である。一方越前・尾張は、自治体史や辞典などで守護・守護代の沿革が示されているが、河村氏以外に詳しく論じた研究はない。なお斯波氏が一時守護職を持っていた信濃・加賀・若狭・越中などの国々については、在職期間の短さもあって、守護在職事実についての言及はあっても、具体的な領国支配に関する専論は出されていない。

斯波家中については、守護代家、特に織田・朝倉氏の研究はその後の戦国時代に勢力を伸ばしたこともあって盛んに行われているが、それ以外となると、義将期までは前述の小川氏著書や河村昭一「南北朝期における守護権力構造―斯波氏の被官構成―」(本書所収)があるものの、以後の時代は、越前・遠江の堀江氏や、越前二宮氏などがされているぐらいである⁽²⁰⁾。

では斯波氏研究において現在課題となっているのは何か。

まず権力体としての斯波氏をとらえ直す必要がある。基礎的な作業はほぼ行われたが、守護領国制論の中で語られてきており、近年の室町時代研究や他の守護層の研究との比較の中で、改めて見直されるべきである。基礎的研究の土台となる文書史料の絶対数が乏しいため、その全容を明らかにするのは困難を伴うが、それでも古記録や宗教資料

が十分に活用されているわけではないので、今後はこれらから斯波氏関係の史料を拾い上げ、文書とあわせて史料を読み込んでいくことが必要である。

そしてこの時期の家を考える上で重要な要素に、惣領家を支える有力な庶家の存在がある。むろん庶家の力が強すぎると、惣領家が取って代わられる危険性を孕むが、そうでない場合は大きな支えとなる。同じ管領家の細川・畠山氏には、細川氏に讃岐・備中・淡路・和泉各守護家、加えて典厩家・野州家があり、畠山氏にも能登畠山氏がいる。一方斯波氏にも、義将の弟義種流があり、義種は兄義将を補佐する一方で、一時的に若狭・越前守護に補任されたほか、加賀守護となっている。ただその子満種の時に守護職を失い、以後は越前大野郡を領する程度であり、室町幕府内で讃岐細川と能登畠山とが重臣会議に顔を連ねたのとは比すべくもない。持種代に、本家当主が幼少であったこともあって、ようやく斯波家を支える立場になるが、これも義敏の家督追放によって失脚するなど、必ずしも斯波氏権力の中では甲斐・織田といった有力家臣ほどの影響力を持てていなかった。この義種流斯波氏の位置付けを今後どのようにしていくかは、大きな課題である。そして陸奥・出羽の大崎・最上・高水寺斯波、末野ら越前斯波氏といった一族との関わりについても、目を向けるべきであろう。

また斯波家中についても、初期の義将段階は検討されているものの、その後の時代の斯波家中は、守護代となった甲斐・織田氏や、後に越前国主となった朝倉氏はともかく、その他はあまり組上に載せられておらず、まずは基礎的な検証を積み上げていき、それをもとに斯波家中がどのように形成され、どのように変容していったかを明らかにする作業が今後必要である。

その他にも、斯波の子弟が入った禅寺や、領国内の寺社との関係といった、宗教との関わり、幕府の遠隔地領主との交渉の中で、斯波氏が取次として果たした役割、幕府内での他の有力守護家や御一家衆・外様衆・奉公衆・奉行人家との関係など、まだまだ多くの検討課題が手を付けられていないままであり、これらを解明することは、斯波氏のみならず、室町幕府そのものや、当時の武家社会、武家と宗教との関係性を見る上でも重要だろう。

二 鎌倉・南北朝期の斯波氏

斯波氏の祖とされるのは、足利泰氏の長男家氏である。家氏の母は名越朝時の娘であったが、家督は北条得宗家の時氏娘所生である弟の頼氏が継いだ。家氏は中務権大輔・検非違使・尾張守などを歴任し、鎌倉幕府でも有力御家人として単独で活動している。そして頼氏の早世で家督を継いだ幼少の家時を補佐し、足利一門の代表者となっている。家氏の子には、庶長子の義利(石橋氏祖)、次男貞数、嫡子となった三男宗家、明覚上人総真がいる。三男の宗家が家督を継いだのは、小川氏の言う⁽²⁴⁾とおり、兄たちの母親の出自が低かったからであろう。

宗家の動静は不明な部分が多い。系図には従五位下左近将監とあり、「北条九代記」⁽²⁵⁾で白井胤資を預けられた尾張左近大夫将監は宗家のことであろうが、正慶元年(一三三二)の関東裁許状案に「足利尾張三郎宗家跡」とあるため、この叙任が本当になされたかなお検討を要する。

宗家の子は、家貞・宗氏・義真・得寿丸・女子の五人が見える。嫡子は家貞とされるが、宗氏を嫡子とするものもあり、先の正慶元年の関東裁許状案中に、宗氏が父宗家の領有関係を幕府に返答していることが見えることから、小川氏は家貞と宗氏は同一人物ではないかとしている⁽²⁷⁾。実際家貞の動向は伝わらず、宗氏のみ確認できるので、家貞が